

音楽ファンは、自分の好きなジャンル・人であれば内容を問わずにコンサートなり舞台なりに行くのだろう。それがファンというものだ。だが私の場合、食の好き嫌いが多いせいか、音楽も口に出る「物」で分類する傾向があるように思う。例えば日本の鴨は食べられないがフランスの鴨なら食べられる。マグロの大トロの脂は苦手だがキングサーモンは食べられる。肉の脂身がダメなのに脂で固めてあるコテキーノは食べられる。これらに共通して言えることは身が締まっていて、コッテリとしているようで実はさらりと溶ける脂なら大丈夫だということだ。因みに肉と魚の皮もダメ。だから皮を捨てるヨーロッパや、皮をカリカリにした中華料理は大丈夫。要するにサクリ噛み切れないものは嫌い。これは明らかに性格を反映している。性格が先か食が先かは分らない。ただ音楽も身が締まっていて歯切れの良いものを好むのは確かだ。

そういうわけでコンサートやオペラに行く場合、歯切れの良いメニューを選ぶことが多いが、最近はずんわり選べるメニューが少ないため下調べをするようになった。コンサートなら名前と曲目を目安に行けるが、オペラはストーリー・演奏者と演じ手の実力と相性・演出次第だし高額でもある。気持ちにも時間にも金銭にもゆとりがないので、楽しめないものに時間を費やすことに大いに抵抗がある。CDを聴いて良ければコンサートに足を運ぶというフランス風にちょっと似て、とりあえずオペラならタイトル・ロールの声を確認する。あとの配役はそれにふさわしいバランスで組まれているのであまり心配しない。それでも必要な情報は全て手に入るとは限らない。

そこでイタリア人でアメリカで活躍したメノッティという人のオペラを確認していたときのこと、まず『電話』というタイトルで2通りの日本語版に行き当たって具合を悪くした。曲の音の高さと言葉の音の高さが一致していないから胃に不快感がやってきた。不気味なイントネーション。しかも日本語の音を変に伸ばされると言葉の意味が捕まえない。ウ〜、どこが優れた作曲家？と、ここで判断してしまっては申し訳ない。そこで英語版を観た。マ〜楽しい舞台。ピアノ一本だけれど最初の音から日本版ベタ音と違い弾むような演奏で同じ曲とも思えない。演じ手の表情も感情豊か。そしてイタリア語版『アメリカ舞踏会へ行く』を2種類観た。アッラ〜きれいな音楽。両方ともオーケストラ演奏であったが、ひとつは歌が見事で引き込まれた。どちらもところどころニンマリではなくクワツと笑える面白いオペラだった。言葉が全てわかっているわけではないのに、その笑いはどこから来るのだろう。フィルムの中の観客と同じ個所で笑えるのは何故だろう？それは一時的な時代のパロディではなく国籍も年齢も問わない人間としての共用性でまとめられているからではないだろうか？だから何年前のフィルムであっても楽しめるのだろう。ここで私はメノッティ氏への誤解を解いて正しく評価できたと同時に日本版メノッティ作品を観に行く自信を失くした。もちろん誰が作っても同じ結果になるはずもないのだが。

いずれにしても「女性は子宮で考える」というが、私の場合、どうやら胃で考えるらしい。そして胃が「おいしい」と判断するのは当然のことながら料理人の腕にかかっている。作品を生かすも殺すも料理人次第。どのように並べてどんなソースで味を引き立たせるか。ついでに言うならシャンソン・フランセーズの場合、希望を言えば多すぎる前菜(お喋り)で飽きる前にメイン(歌)を出していただきたい。(2012.12.28)